せ も

華園手引種

二編 全

2

夫抑もゝ天地陰陽の和合を本に
して草木生じ出生の形あらう
してのちをを観る花の枝さししをきむ時は
すべて中庸のこゝろを含み出生風情の性
あらはむなるに主位客位自然の順ひ
附の性ましたる其自然をよく連しみ
おのづから順なる形となるされば
其源きに付む枝ぶりよくおのゝ枝の

去頃むかしより世々瓶花は
法の何ひとへ法陽の法里これをとりて
当流のかまへとなるなれど近年はしきハ
四季折々小諸君子集りて馬蘭の
會とて挿並へる数瓶は中にすぐれ
たるを二三瓶写しとゞめてのち
初心のためになんとおもふに馬蘭
生け槿二編と題して草菴に[illegible]

桜木にのぼせし社中の進免
数をひろひ写し畫の法をもまじへて
唯花形をしめし葉は表裏法陽の
法をひろふのみをなのれば挿花く人の
あざけりをかへりみず久しき代々
むかしのさかし侍りぬ

嘉永五壬子年の秋　天生斎一流

天圓地方合形
花瓶鏡之起源

馬蘭挿花ハ心体ハ陰分表ふの座むかふにして茎葉ともかき様
しつらまして葉形挿付て見苦しき時ハかろて能く渡き姉き
とりて皆時瓶に養ひ直て后挿てよし直ニハ草合ごく
葉のさまどりてわつかひかきまのなを
まき出合挿して
葉乃略ちぐ表裁
ときハ陰分目立
ざる挿に用乃挿く
遣ふ表ふの如く表ふの縁挿
たち縮ひて用ゆべし
洗く半の数に入べし是則草んの入方也

馬蘭中よなひ方ハ此如く糸线かけ一枚も二枚も酒に
根〆入逢ハ不極まひ安くなり
葉の色も能なるをはやれ出か
りのなるもまし葉に酒线ず
一枚枯ばかりに入逢翌日出し
酒线よく拭きえて
入分もよしまし水线下ケよく まりしも葉も
右の如くまきて酒に入逢て茎葉もはしくなり
また組入るる時も下此図の如く何れも組合糸线かけ酒に
入逢て後廃の時その時なるを能く株を分組入にする時ハ此枚にして入べし
二株も黄うれ三株より五株七株九株と湯の株に分て入逢し

升葉三本 出生の心を以て空中に入分
馬蘭の出生ハ地中にて三本
なりて地中より地上へ
成長地上ハ一花葉の二本なる
かゆへ友先出生の地と
人にならへも若葉の良
出生入分ても三本とし
後ハ三本なれハ出生のまゝ
知る也し

天
人
地

十五まん三才の生方
体
用
留
十三まん之才比合方
天
体とも云
真とも云
天とも云
人
地
用とも云
行とも云
人とも云
留とも云
草とも云
地とも云

九てん三ぞんの生方

体

留

用流

五てん三ぞんの挿方

体

留

用流

七まい三光の入方

体

留

用流し

十一まい三光の入方

体

留

用

体之うら流し口伝

上す七ヲん陽
下十四ヲん陰

上下陰陽和合して
四十つヲんの分

躰

留

用流し

天

地

人

すヲん入舩の分口傳

躰

用

留流し

出舩入舩も挿方八帆むき
櫓むきのこころえての事

上口に十一まん陽
下口に六まん陰
上下陰陽和合して
十七まん此分

体

留

行

竹

用流し

七まんの分

体

留

用流し

陽の形に五まん
陰の形に弐まん

陰陽和合垂形
七まん此入方口傳

体

用

留

陰

陽

九まんの篭此入方口傳

体

用

留

ホつまんの合方

体

用

留流し

十つまんの合方

体

用

留

七ばんの図

体

用

留流

廿二ばんの図

体

用

留流

真に十一まん

真行艸之飛合して
七三本ずつ入方

行ミ七まん

艸ゝ芽吹葉之舟
花形入ん

体

留

用流し

七まん

月光形の入方口伝

十一まい株分留之図

体
用
留
天
地
人

五まいの図

体ぞへ流し

体
用
留

十五本株分図
体
留
天
人
地
用
流
行
ナつまんの入方
体
留
用
流

十五ほん此入方

体

用

留

体残之流

七ほん細き物此入方

体

用

留

体

用

留

陰

陽

十一てん株分留口傳
出船入方口傳

十一まんれ入方

体

用

留流

十一まん合方
体
用
留
十三まんの合方
体
留
用添

十八

九まいの谷方

体

留

用添

十九まいれ谷方

体

体添

用

留

上下合して四十七まんの入方

体

体添うご添し

留

用

陰

陽

上に十まん
下に三まん
此如く両瓶とも陽数に入るべし
陰数陽数と入分ハ弐瓶入て壱瓶のことし
体
天
人
地
用
留
七
体
用
留

古まん広口の入方

三株合して 二百卅五本
上 八十七本
中 九十一本
下 五十七本
大葉 七十一本
芽吹葉 十七本
升葉 六十五本
体
苗
天
人
地
艸
行
用

嘉永五壬子年秋

浪花

中庸 生花 三生流家元

天生齋蔵板